

阿波の干拓新田

—新田絵図を中心に—

徳島の北部の海岸線は、江戸時代の大開発による干拓事業により成されています。江戸時代後期に作られた干拓地の絵図から、その具体的な様子を紹介します。



入場無料

【展示期間】

2019年4月23日(火) ~ 8月4日(日)

【開館時間】午前9時30分~午後5時

【場 所】徳島県立文書館2階 展示室

【休 館 日】毎週月曜日(祝日の場合は翌日)
毎月第3木曜日

【展示解説】令和元年5月12日(日)・6月7日(金)・7月20日(土)

絵 図 講 演 会

【演題】阿波の新田絵図を語る

【日程】令和元年6月1日

【講師】羽山久男 先生

文書館ウィーク関連行事



文化の森総合公園 徳島県立文書館
Tokushima Prefectural Archives

770-8070 徳島市八万町向寺山
Tel. 088-668-3700 FAX. 088-668-7199
<http://www.archiv.tokushima-ec.ed.jp/>



ごあいさつ

「世界は神がつくり給うたが、オランダはオランダ人がつくった」

これは中世以来の干拓事業によって国土を創りあげてきたオランダ人に対する賛辞としてよく引かれる言葉です。その伝で言うと、徳島県の海岸地帯のかなりの部分は、江戸時代以来、人々が干拓によって営々として創りあげてきたものです。遠浅の海岸に堤防を築いて水門を設け、潮の干満などを利用して一帯を干上がらせて農地へと変えていく。大型重機など無い時代に、ほぼ人力によってこれらの大事業を成し遂げていったのです。このような努力の積み重ねが江戸時代を「大開発の時代」にしたといえます。

しかし、風波の強い紀伊水道に面した徳島県では干拓工事は大きな困難を伴いました。また、せっかく完成した干拓新田も宝永と嘉永の南海地震・津波などの自然の猛威に容赦なくさらされています。壊滅状態となった干拓地を呆然と見つめながら、再建に向けて立ち上がっていく人々の姿を当時の古文書は伝えています。現在に残された当時の干拓新田は、自然に立ち向かっていった先人の営為の証といえます。

当館ではこれまでも干拓新田を何度か展示事業で取り上げてまいりましたが、今回は当館収蔵の絵図を中心にご紹介しようと思います。江戸時代後期における徳島藩の測量と絵図作成技術の高さは広く知られているところであります。干拓に取り組んだ人々の努力ととあわせて、関心を持っていただければ幸いです。

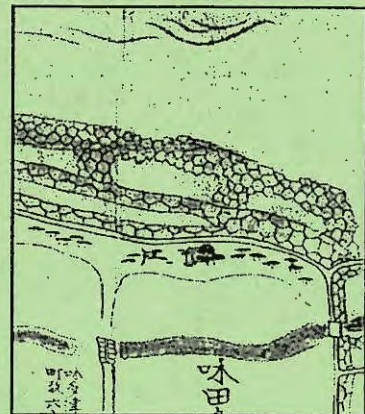
最後になりましたが、貴重な歴史資料である絵図や古文書などを当館にお預けいただいた所蔵者の皆様に心からお礼を申し上げます。

平成31年4月23日

徳島県立文書館長 徳野 隆

●コラム 風波との闘い

干拓新田を描いた絵図には、堤防の外側の海中に亀甲型の石や逆茂木のような杭が描かれていることがあります。これらは波の力を弱めるテトラポットのような役割を果たすものです。また、和田津新田の周囲には防風林として長大な松林が植林されました。これらは風波の強い地域で干拓を行うための人々の知恵といえます。なお、松林で採れる大量の松葉は燃料として貴重な現金収入となりました。



和田津新田絵図より

阿波の干拓新田

江戸時代は「大開発の時代」と言われている。低湿地などの開墾が進み、村の境界まで耕地が広がった。さらに土木巧者と呼ばれる人々の活躍と共に堤防や石垣・用水や排水技術が進歩し、江戸中期には河川河口域の干潟や遠浅の海で大規模な干拓工事が可能となった。こうした開発については、藍商や国内外商人の資本導入を許可するなど徳島藩は積極的な政策を採っていた。

耕地開発は、江戸初期から積極的に行われていた。例えば、板野郡木津野村（現・鳴門市撫養町）は吉野川河口（現・新池川）の萱野であった場所を段関村吉成空兵衛が開発した後の新開検地帳が残っている。正保3年(1646)の国絵図には282石余新田、明治初年には耕地95町歩余、人口640人の村に成長している。

このように比較的耕地にしやすい場所から開発が始まり、江戸時代後期には大規模で困難な地域が残っていた。水害や地震・津波などの被害もあったが、干拓新田の開発が歩みを止めることは無かった。

◎阿波河川河口域などの主な大規模新田

	新田名	現在地名	規模	開始年代	備考
吉野川 流域	長江新田	鳴門市大津町長江	29町歩	寛政8(1796)年	
	豊中新田	松茂町豊中	12町歩	天明3(1783)年	
	住吉新田	松茂町住吉	65町歩	天明7(1789)年	
	豊久新田	松茂町豊久	52町歩	文化4(1807)年	
	満穂新田	松茂町満穂	43町歩	文化4(1807)年	
	豊岡新田	松茂町豊岡	58町歩	享和1(1801)年	
	米津新田	徳島市川内町	28町歩	寛政4(1792)年	
	富久新田	徳島市川内町	26町歩	寛政4(1792)年	
	富吉新田	徳島市川内町	26町歩	寛政4(1792)年	
	松岡新田	徳島市川内町	8町歩	寛政4(1792)年	
	金岡新田	徳島市川内町	7町歩	天保2(1831)年	
	小松新田	徳島市川内町	82町歩	文政期	
	金沢新田	徳島市金沢	14町歩	文政期?	
	末広新田	徳島市末広町	14町歩	天保10(1839)年	塩田
	万代新田	徳島市万代町	5町歩	弘化3(1846)年	
勝浦川流域	鶴岡新田	徳島市論田町	13町歩	明和年間	
小松島湾	金磯新田	小松島市金磯町	45町歩	元禄2(1689)年	
	和田津新田	小松島市和田津開町	49町歩?	正徳6(1716)年	
	間新田	小松島市間新田町他	23町歩	天和年間以前	
那賀川 流域	辰巳新田	阿南市辰巳町	50町歩	天保6(1835)年	
	豊益新田	阿南市豊益町	30町歩	宝暦6(1756)年	

※規模は、実態に近づけるため『郡村誌』（明治9年）の税地等を参考にした。

金磯新田（小松島市）

現・小松島市金磯町。元は勝浦郡田野村・小松島浦・日開野村・芝生村の堤外^{しぼう}地で、潮干潟が広がっていた。元禄2(1689)年の洪水による勝浦川・芝生川等の決壊による流出に、徳島藩目論見奉行が造用銀40貫目と見積もり、小松島浦の廻船商であった多田助右衛門が出願し許可された。同4年には約1,000間とされる大手堤と石井利(水門)の工事を終え、翌5年から5年間の約束で鍬下年季(年貢免除期間)を受けたが、完成には宝永元(1704)年までかかった。さらに助右衛門は、金磯新田の開発のみならず、橋本大二郎に下札されていた大林村・坂野村の北部干潟20町歩余り(後の和田津新田)の開発権を買い受けている。

宝永4(1707)年10月の地震・津波により大手堤が大破、新田地は大きな被害を受ける。大林・坂野村北部の干潟開発権は、那賀郡富岡の栗本家に譲り、多田家は金磯新田の復興に全力を尽くすこととなる。

◎「(金磯新田絵図 元禄3(1690)年普請大図)」寛政9(1797)年写



寛政9年に作成された金磯新田の絵図。新田内に色付けされている部分があり、これは元禄3年築立の元新田と安永3(1774)年築立の新田内における8つの榜示を表している。榜示内には土地の区画と耕作人名が書かれている。

また、絵図の各所には新田普請に関わる記述が見られる。例えば、新田南側の囲堤防には、宝暦年中(1751~1763)・天明元(1781)年・寛政9年に水害や他の新田築立との兼ね合いにより堤防を強化するため引堤(堤防の位置を内側にずらすこと)を行ったことと、それぞれ元の堤の位置が記されている。

◎「勝浦郡金磯新田絵図(分間図)」文政2(1819)年



文政年間に作成されたと思われる同新田の絵図。囲堤内の田畠、川、堤沿いや沿岸に植えられた松、烏帽子岩、堤外の弁天山、石波止など当時の様子が描かれている。

加えて、絵図の中を5つに区切っている赤い点線が見える。南西の領域の中には「元禄拾四年御下札場所」、その東には「元禄十四年御下札ノ内開キ残 宝暦拾三年御下札場所」と、下札を与えられた(=干拓を許可された)年が書かれており、干拓の順序や予定がうかがえる。

和田津新田（小松島市）

現・小松島市和田津開町・赤石町。元は金磯新田の東、和田島村の西、大林村・豊浦浜・坂野村の北に広がる干潟および遠浅の海岸であった。元禄8(1695)年徳島藩士佐藤儀右衛門らの連印で橋本大二郎にこの干潟20町歩ほどの干拓新田開発を委任したが、これ以前から田地5町ほどの開発が行われていたことが知られる。元禄13(1700)年には、東側を坂野村弥兵衛、西側を小松島浦助右衛門（多田助右衛門・金磯新田名主）が開発を請け負うことになったが、宝永4(1707)年の地震・津波により堤が大破し、ほぼ元の干潟に戻ってしまったという。正徳6(1716)年那賀郡富岡の紀伊國屋栗本四郎兵衛が徳島藩の御蔵所に、新田開発の自力普請を願い出て許可を受けた。波止石や石垣の石などは大神子や根井山の石切場から、土は赤石山から船で運ばれた。

享保14(1729)年に40町歩の新開地が完成した。翌年茂平への代替わりがあり、歟下年季が明けた延享5(1748)年、正式に「和田津新田」と命名された。茂平は完成した新田の西側に、明和3(1766)年約50町歩となる和田津新田西開を計画し許可された。安永5(1776)年までにその内東側の30町歩が完成し中開、寛政3(1791)年にはさらに西手の約15町が開発されて西開と名付けた。同年には元開と中開分が検地を受け、田畠34町2反余・石高241石余と定められた。嘉永7(1854)年11月の地震・津波により大きな被害を受け、栗本家は苦境に立ったという。

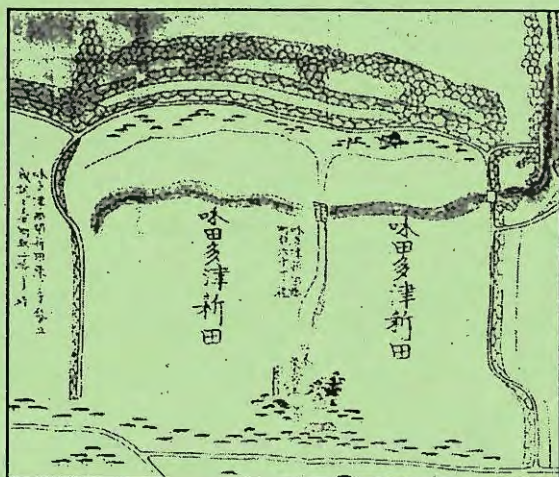
◎「田地御年貢成（和田津新田絵図）」（延享5(1748)年以降）

父、栗本四郎兵衛の遺志を引き継いだ茂平はさらに新田開発を進めていく。苦難の末、延享5(1748)年遂に検分が完了。絵図は後に元開と名付けられる地域である。西側には既に僅かな石組みが見える。中央にはまだ大きな水たまりが残っている。実際に元開と中開の検地が実施されたのは寛政3(1791)年であった。

波止用の外囲は亀甲形に削られた石垣が50間（約90m）、内囲（新廻り）として長さ1,300間（約2,340m）の石垣が体裁良く強固に組まれている。周囲には防風林として植えられた800間（約1,440m）程の松が細かく描かれている。

◎「寛政二庚戌四月（和多津西開新田西ノ手目論見絵図）」寛政2(1790)年

干拓拡大の過程が見て取れる絵図である。目論見とあることから、西開の計画図である。和田津新田は元開から西へ中開・西開と命名されることとなる。文化2(1805)年頃には全ての土地の検地が済み、年貢を納めることが定められた。絵図の中には、名主栗本茂平の居宅、さらに新田周囲には防風林や波止めの石垣が丁寧に描かれている。



あいの 間ノ新田（小松島市）

現：小松島市間新田町。那賀郡和田島村と坂野村に挟まれた地域。東部は紀伊水道に面する。天和2(1682)年の「飛騨守え被進御地方之御帳」（国文学研究資料館蜂須賀家文書）には坂野・和田島間新田と見え高207石余、人無しとなっている。富田藩は延宝6(1678)年蜂須賀隆重が5代徳島藩主蜂須賀綱矩つなのりから5万石まさかずの分知を受けた新田藩で、その領地の中に間新田が見える。その後3代正員が、宗家の嫡子となって徳島藩に所領を返上したため、享保10(1725)年に廃藩となり、間新田も蔵入地となった。文化11(1814)年の「間新田御国絵図御用ニ付諸品指出帳」では田21町7反余、高208石7斗余とあり、石高等はほとんど変わりが無い。

◎「那賀郡和田島・間ノ新田絵図（分間図）」文化11(1814)年

岡崎三蔵ら徳島藩の絵図方が作成した、和田島村および間ノ新田の分間絵図の複製。和田島村庄屋森家旧蔵。和田島村の耕地は灰色、間ノ新田の耕地は緑色に塗り分けられている。間ノ新田は、宝永4(1707)年の地震・津波で被害を受け、長期間海水が田地に浸透し作物ができない状況にあったが、享保20年和田島村分平が間ノ新田の北西側の入江18町余りの干拓新田造成を願い出た。その後の栗本家の絵図などを見ると、間ノ新田の地先は和田島村養兵衛新田と書かれ、北西の海岸線に石垣を伴った堤防などが描かれている。堤防の内側は松林とし、さらに堤防の外側には波止が築かれ、砂が付いている様子が見える。このように間ノ新田を含め内側の耕地を守る仕組みが着々と作られていた。

◎「湊之内新田絵図 坂野控」（近世）

坂野村が所蔵していた絵図を写したもの。和田島村養兵衛新田を中心に、坂野村の小字である湊、間新田、和田津新田などの排水路や堤防（土手）とその分担当を詳細に描いている。こうした干拓の新開地では、堤防をどこが責任を持ってメンテナンスを行うのか、堤内の水をどのように外に流すのかが重要な問題となる。現状を明らかにする付箋が数多く貼られている。

坂野村湊が管轄する土手の南側に、3畝の空地が描かれ土取り場とある。ここに4枚の付箋が貼られており、坂野村と和田島村の係争地となっていたようだ。養兵衛新田の名主和田島村養兵衛は、坂野村湊の悪水路と土手に囲まれたこの土地の開発権を願い出たが、水害により耕地にできず空き地となった。そこでこの土地の土を堤や干拓工事の材料として用いるために掘り取り始めた。新田開発を進めるためには、土の確保は必須だが、坂野村側は見過ごせなかったのだろう。



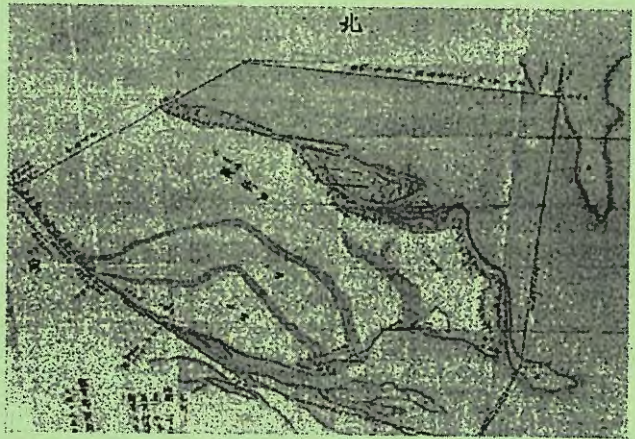
辰巳新田・豊益新田（現・阿南市辰巳町及び豊益町）

辰巳新田は、那賀川および桑野川に挟まれた河口の三角州に位置する。天保6（1835）年、那賀郡横見村（現・阿南市横見町）の新兵衛という人物が開発に着手するも、資金不足に陥る。その後、同11（1840）年に勝浦郡小松島浦の豪商井上甚右衛門に質入れされ、同14（1843）年には全面的に売り渡された。徳島城下から辰巳（東南）の方角にあることから「辰巳新田」と名付けられた。

◎「那賀郡巽新田絵図」 明治13（1880）年

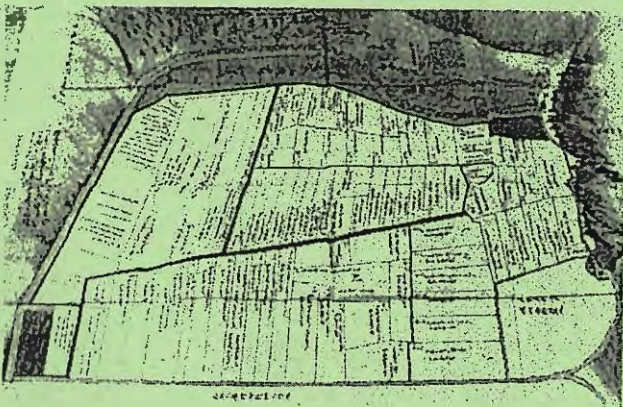
◎「安政六末年八月辰巳新田絵図」 明治13（1880）年

この2点の絵図は共に明治13年に描かれたものであるが、それぞれ天保12（1841）年・安政6（1859）年の絵図を写したものである。井上甚右衛門が開発を引き継いですぐの天保12年の段階では、中央部にはまだ水の流れがあり、陸地が分断されている。干拓工事が正に進行中であったことがよくわかる。18年後にあたる安政6年の段階では、中央に横たわっていた水の流れはすっかりなくなっている。周囲の堤防も完成し、ほぼ現在に近い姿となっている。



豊益新田は、桑野川の河口部、西路見村付近の海岸部に位置する。始めは福村新田と称された。宝暦5（1755）年、那賀郡刈屋村（現・阿南市那賀川町刈屋）の庄屋八郎兵衛が開発に着手したとされる。しかし、すぐに資金難に陥ったため、翌6（1756）年には、那賀郡柳島村（現・阿南市柳島町）の豪農伊勢権左衛門が開発の権限が与えられた。豊益新田は、阿波国内の主な河川・河口部の大規模開発の中でも比較的早期に着手されている（当図録3P参照）。後には、辰巳新田と同様に井上家が名主となっている。

◎「天保十四年卯歳五月豊益新田絵図（写）」 嘉永7（1854）年



描かれているのは、開発着手から約90年近くが経過した豊益新田である。周囲は堤防でぐるりと囲まれており、完成図にも思える。ところが、現在とは地形が全く異なる。東南端に描かれた淡島神社の東側には海が迫っているが、現在の淡島神社から東は大きく陸地が広がる。辰巳新田と違い、この時、豊益の開発はまだまだ途上だったのである。

展示資料一覧

No.	表題	年代	資料番号
分間図および分間図関係資料			
1	勝浦郡金磯新田絵図(分間図)	文政2(1819)年	カナ100153
2	那賀郡和田島村・間ノ新田絵図(分間図)	文化11(1814)年	モリ300055
3	和多津新田絵図(岡崎三蔵改 分間図)	(近世)	サカ100268
4	那賀郡坂野・和田島・間新田御国絵図御用ニ付諸品指出帳	文化11(1814)年	モリ300054
金磯新田			
5	(金磯新田絵図 元禄3年普請大図)	寛政9(1797)年	カナ100154
6	乍恐申上ル覚(横須新田赤石開之外干潟手普請に伴う用水の件)	元禄15(1702)年	カナ100016
7	覚(赤石山定石出口通り道下札の件)	明和2(1765)年	カナ100044
8	覚(金磯新田北手潟新開下札の件)	文政2(1819)年	カナ100039
和田津新田			
9	田地御年貢成り(和多津新田絵図)	延享5年以降	ケリ00712
10	寛政二庚戌四月(和多津西開新田西ノ手目論見絵図)	寛政2(1790)年	ケリ01037
11	御尋ニ付申上ル覚(和田津新田築立成立申上書・控)	安永4(1775)年	ケリ00399
12	覚(苗字帯刀御免切田壹町下付証文)	天明6(1786)年	ケリ00137
13	那賀郡和田津新田名主栗本茂平儀同所西開新田築立申ニ付御道具受取相渡通	享和3(1803)年	ケリ00076
間新田			
14	坂野村弥兵衛新田(元禄坂野・和田島・豊浦浜目論見境界絵図・写)	寛政2(1790)年	ケリ00718
15	湊之内新田絵図坂野控(坂野村苅屋湊戸の内惣囲堤絵図)	(近世)	ケリ01033
16	(坂野村湊之内囲堤絵図)	(近世)	ケリ01034
17	覚(間ノ新田秋立毛損毛に付検見年貢上納の件・控)	享保3(1718)年	モリ303882
18	仕上御請書之事(間ノ新田地先新田築立拝借銀の件)	享保20(1735)年	モリ300224
辰巳新田・豊益新田			
19	那賀郡異新田絵図(写)	明治13(1880)年	イノウ06416
20	(安政6未年8月 辰巳新田絵図・写)	明治13(1880)年	イノウ04241
21	徳島県那賀郡辰巳新田村全図	明治前期	イノウ08789
22	那賀郡辰巳新田用水入口請関御願絵図	嘉永7(1854)年	イノウ04225
23	申上覚(辰巳新田用水水不足につき用水入口より川中へ請関普請の願・控)	嘉永7(1854)年	イノウ01650
24	(辰巳新田境界傍杭写)	(幕末期)	イノウ04552
25	(天保十四卯歳五月豊益新田絵図・写)	嘉永7(1854)年	イノウ04230
川内町の新田			
26	絵図(悪水吐居替新堀図面,金岡新田)	元治元(1864)年	カナツ00193
27	絵図(荒井幸次郎新田図)	(近世)	カナツ00203

※資料保存のため展示品の一部を替えることがあります。

☆講演会「阿波の新田絵図を語る」(文書館2階講座室・展示室)

講師 羽山久男先生 日時:6月1日(土)午後2時から

☆担当職員による展示解説(文書館2階講座室・展示室)

日時:5月12日(日)・6月7日(金)・7月20日(土) 午後1時30分から

文書館の逸品展

「阿波の干拓新田」

平成31年4月23日発行

編集・発行

徳島県立文書館